提出日：2010 年 3 月 20 日

日本教育工学会 2009 年度・6 月シンポジウム　参加報告書

鈴木　大輔（東北大学大学院情報科学研究科　教育研究支援者）

調査・場所
東京大学 本郷キャンパス 福武ホール
日程
2009 年 6 月 20 日（土）
参加者
鈴木 大輔（東北大学大学院情報科学研究科 教育研究支援者） 石渡 陽子（東北大学大学院国際文化研究科 フェロー）
目的
学力の評価に関するシンポジウムに参加し，評価方法に関する技術を習得するため。
概要および成果

【テーマ】：　「学力の評価について考える」

■ 司会

美馬のゆり（はこだて未来大学）

■ 登壇者

1. 学力評価を管理する立場として／田仲誠祐（秋田県教育庁）
2. 学力評価を分析する立場として／猿田祐嗣（国立教育政策研究所）
3. 比較教育から学力評価を研究する立場として／垂見裕子（お茶の水女子大学）
4. 教育工学から学力評価を研究する立場として／木原俊行（大阪教育大学）

本シンポジウムは，午前中に「教育工学会重点 3 領域研究と今後の課題」と題した報告・ディスカッションの後に行われた。ここでは，午後のシンポジウムのみの報告をする。

1.　学力評価を管理する立場として／田仲誠祐（秋田県教育庁）

平成14年度から，秋田県内の全生徒を対象として学習状況の調査が行われている。調査の問題作成，採点，データ処理は学校の教員が直接担当している。各学校では調査結果から短いスパンで解決可能な課題を見つけ出し，指導を行っている。その結果，全国学力調査で小学校の国語・算数が2年連続1位を獲得している。また県民に対しても意識の共通化を図り，家庭における学力向上に対する協力と生徒の生活改善等などが行われている。

2.　学力評価を分析する立場として／猿田祐嗣（国立教育政策研究所）

PISA: 高校生を対象とするPISAの評価対象は，将来生活していく上で必要とされる知識・能力(リテラシー)であり，能力，状況，知識，態度の4つの側面から評価される。試験は複数選択肢式と全記述式の設問から構成されており，一部を回答する。

TIMSS: 中学生を対象とするTIMSSの評価対象は，教育達成度を評価対象とする。各国の教育カリキュラムを考慮し，前提となる「意図されたカリキュラム」，教師が提供した「実施されたカリキュラム」，生徒から表出される成果としての「達成されたカリキュラム」が評価され，教育課程や指導法の改善のために利用されている。

3. 比較教育から学力評価を研究する立場として／垂見裕子（お茶の水女子大学）

国内の学力に関する調査結果およびPISA(2000,2003,2006)の調査結果の一部が報告された。第一に，生徒の学力は保護者の生活水準や家庭環境が影響することがわかり，保護者調査の必要性が述べられた。第二に，評価結果を吟味する際は，学校内格差および学校間格差を区別して吟味する必要性が述べられた。また，校内格差は，家庭背景に起因し，日本国内では非常に小さい傾向にある一方，学校間の平均値を比較することで現れる学校間格差は非常に大きい傾向にあることが報告された。ただし，PISAの結果は，高校入試の影響が指摘された。

4. 教育工学から学力評価を研究する立場として／木原俊行（大阪教育大学）

「総合学力研究会」によるプロジェクトの一環として，教師が自らの指導を改善するための情報提供を意図して実施した調査の中から，特に「家庭学習力」に焦点をあてた結果が報告された。ドリルと発展問題との両方に取り組む生徒の学力が高いこと，家庭学習指導力の総合スコアが高い担任の場合，生徒の学力が高い傾向があることなどが報告された。